
KNOCK

空海林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KNOCK

【Nコード】

N1551N

【作者名】

空海林

【あらすじ】

ある夜中、突然ドアは叩かれた…。

（前書き）

夏ということ、ホラーを書いてみました。ただ、ホラー作品が苦手な書き方がよく分からないので、過度な期待はしないでください。

「あー、疲れた！」

大きなため息をつき、愛沢あいざわ 羽織はおりはリビングのソファアへ寝転んだ。

羽織はOLである。仕事場では面倒な仕事を押し付けられ、揚句上司に怒られ、たまにセクハラも受けている。

羽織は疲れきっていた。

ソファアから起き上がり、冷蔵庫を開ける。確かビールがあつたはずだ。仕事で疲れた時、これだけが自分を癒してくれる。

ソファアに腰掛け、おつまみのピーナッツを開けビールを飲む。一気に飲み干す。

「ふーっ！ やっぱり疲れた時はこれが一番！」

少しずつ酔いが回ってきた。今日の疲れが、嘘のように消えていく。

「明日も早いんだよね…。よし、仕方ない、寝るか！」

テーブルに置いてあるリモコンを取る。これは家の電気のリモコンだ。羽織の住むマンションの電気は、リモコンで操作することができる。

部屋の電気を消し、ソファアに寝転ぶ。今の仕事場は給料が安いため、ベッドは買っていない。が、もし仮にベッドを買うお金があつたとしても、それは全て別のことに使うだろう。独身である内はベッドは必要ない。ソファアで十分だ。

ビールの影響もあるのだろう、目を閉じた途端に、眠くなってきた。そしてそのまま、眠りについた。

夜中…。

羽織は小さな寝息を立てて眠っている。部屋の中で聞こえるのは羽織の寝息と時計の針の音だけだ。

とても静かな夜だった…。

トントン…

不意に、ドアを叩く音が聞こえてきた。

トントン…

まだ叩いている。

その音で羽織は目が覚めてしまった。

「誰？」

トントン…

「セールス？こんな時間に？」

時計を見る。時計の針は2時を指していた。

うるさいが、無視していればその内いなくなるだろう。無視が一番だ。

トントン…

無視…。無視…。

トントントン…

結構長いこと叩き続けている。いい加減、イライラしてきた。

………

………

静かになった。どうやら、やっといなくなったみたいだ。

これでやっと寝られる…。

ドンドンドン！

さっきよりも大きな音が聞こえてきた。いなくなったと思ったが、どうやらまだいたみたいだ。

ドンドンドン！

「あーもうっ！うるさい！もう怒った。怒鳴って追い返してやる！」

羽織はドアへと歩き出した。

そしてドアを開ける。

「さっきからうるさいんですけど！早くいなくなっ
て…」
ドサッ！

肩に何かが乗っかってきた。

それは大きく…、多分人間位の大きさだ。

それからは赤黒い液体が垂れていて、すでに玄関には水溜まりができています。

それはあたしの耳元で何か…、そう、うめき声のような音を上げている。

そのの、そう、腕のような物は、あたしの首辺りへ手を延ばしている。

まさか…。

思わず息が詰まる。体が震える。まさかこれは…。

「うゝあゝあゝ」

「大変！こんなに大怪我して！」

「うゝあゝ…、あゝ？」

「とりあえず中に来て！」

その人の肩に手を回し、リビングへ連れていく。

事故にでも遭ったのだろうか？ならば早く治療しなくては。

とりあえずソファーに寝かせておく。こういう時、ベッドがあればもっと良かったのだろうが、無いものは仕方がない。

「ちよつと待ってて。今救急箱持ってくるから」

あたしはマンションの一部屋を借りて暮らしている。その中であたしの借りている部屋は最も安い部屋なのだが、それでもバス・トイレ付きで、リビングと合わせて3部屋あるのだ。だが独身なので、基本リビングしか使わない。

確か救急箱は、バスルームにあるはずだ。

「えーと…、あつた！」

救急箱を持ち、リビングへ急ぐ。

「まずは消毒しないとね」

その人の上着を脱がせ、傷口に消毒液をかける。

「少ししみるけど我慢してね。えと、次は…。出血が凄いからガーゼして包帯巻いておくわね」

傷口が開かないように、丁寧に巻き付けていく。

専門的な知識が無いから分からないが、多分これで平気なハズだ。

「それじゃ、しばらく動かないでね。あ、あたしは羽織。えと、あなた名前は？」

とりあえず名前が分からないと、色々不便だ。

「うゝあゝ。せ、清二」

「清二さんか…。よろしくね。あ、少し待ってて」

そう言い、台所に向かう。

「怪我人に食べさせる物といえば…、うん。リンゴしか無いよね」
包丁を持ち、リンゴを剥く。リンゴの皮を剥くのは昔から得意なのだ。

あつという間に剥き終わったので、すぐにリビングへ向かう。

「はい、リンゴです。あ、今自分じゃ食べられないか…」

切ったリンゴをフォークに刺し、清二に差し出した。

「はい、あーん」

「あゝ、あゝ…」

遠慮しているのだろうか？

「はい、あーん」

パクリ

あ、食べた。

「いっぱい食べてね！」

次々と、リンゴを食べさせた。

リンゴが無くなったところで気が付いた。そういえば救急車を呼んでいなかったな…。と。

「待ってて！すぐ救急車を呼ぶからね」

電話機へ向かう。

「あゝ、あゝの…」

「ん？どうしたの？」

「えゝど…」

清二はすっと起き上がり、床に膝を付いた。

「あ、じつとしてないと傷口が広がっちゃう…」

手を付き、深々と頭を下げる。そして静かに口を開き、言った。
「…羽織さん、…好きです！」

（後書き）

清二は霊です。昔事故に遭い死んでしまった男性の霊です。ただの怪我人では無いので間違えないように！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1551n/>

KNOCK

2010年10月21日22時01分発行